

年収が上がる  
学びの習慣



歴史の  
一流は



「師匠」

から何を

学んだのか



Let's Learn  
from Mentors  
Like Elites Do



加来耕三  
Kouzou Kaku



はじめに

## AIの時代だからこそ、「師匠」が必要

——AI（人工知能）が、持て囃はなされる時代となりました。

子供でも簡単に、独りで画像や動画を作ることができ、作者不詳のキャラクターが世界中で創られ、TikTokやInstagramといったSNSで拡散し、その中から現実に、ヒット作も生まれているようです。

ChatGPTやGeminiといったAIの新しい道具ツールが登場したことで、新しい工夫アイデアを形にすることが、極めて迅速にできるようになりました。おかげで、無名の若者が気軽に創ったキャラクターが、瞬く間に世界を席卷せっけんする時代が到来したのです。

AIの出現により、時間をかけて手にした熟練の技術・手練スキルや、それを具体化する資金と保障がなくても、気軽に作品を生み出せるようになり、そのため、あらゆる創

作の分野は、一斉に関門ハドルを下げることになりました。

人間の専売特許だったはずの創作の領域に、AIが踏み込んできたことで、誰もが一端いっぽの創作家クリエイターになれるようになったのです。

映像や音楽よりも、処理する情報量の少ない文章の世界では、すでに人間の作品とAIによるものの判別が、難しくなってきました。

このままAIが、人間の求める新しい刺激、快楽といった欲望・要望に応え、安く大量に生産される情報内容を増やしつづけたとしますと、人間のプロの創作家クリエイターは、遠からず大きな岐路に立たされることになるでしょう。

コンテンツが溢れる中で、文章の個性や味わいにこだわらず、手軽に楽しめる面白いもの（程度は低くても、許せる範囲のもの）——例えば、ジェットコースターのよゆうなスピード感のある物語ストーリー、あるいは、どんでん返しが続くようなハラハラドキドキする刺激を求めていくと、瞬時にイラストや音楽、文章を生み出せるAIに、人間が勝つことは難しくなるに違いありません。

そのことは、歴史がすでに証明しています。

かつて、あらゆるものは手作りの「オーダーメイド」II手工業でしたが、マニユファクチュア工場制手工業を経て、今では大半の分野・商品が、グレートインダストリー機械制大工業となっています。

目先の利きく人の中には、すでにAIを活用している人も多いでしょう。

では、創作の世界も「大工業」と同じようになるのでしょうか。

「工業化」が進むということを作成に当てはめれば、人間の創作物から学習したAIが、作品を大量生産するということになります。

当然のことながら、創作物全体における人間の存在・割合は、薄められてしまいます。

株式を扱う世界に、「希釈化」（稀釈化）という言葉があります。

発行株式数の増加により、株主の未来の実質的な持ち分が減少することを、「希釈化」といいますが、AIの大量生産はこれとよく似た現象といえるかもしれません。

筆者には、「出で溜がらし」（何度も煎せんじ出したり、煮出したりして、味や香りが薄くなったもの）のお茶と同じに思えてならないのですが……。

先に述べた「遠からず大きな岐路に立たされる」とは、まさにこのことです。

「出涸らし」をくり返したお茶を飲み続けるのか、その都度、新しいお茶を入れ直すのか。「出涸らし」を覚悟で、AIを活用して「大工業」へと向かうのか、あくまでも自分の感情・思考をもとに、試行錯誤をくり返しながら、七転八倒（しちてんぱつとう）（転げ回りながら苦しみ、悶えもた、のたうち回る）をしつつ、創作を続けるのか。

筆者は、後者でありたい、と思つてやってきました。

これから先も、AIを使うつもりはありません。

なぜならば、迷い、悩み、苦しみ、ようやく辿り着いた新しい工夫や考え方、表現方法が、読者に共感してもらえ、褒められたときの喜びを、全身で実感したいからです。AIを使うと、この一番の「醍醐味（だいごみ）」（最上のも）を、AIに与えてしまうことになり、自ら執筆するという本来の意味を失ってしまいます。

これでは、本末転倒というものでしょう。

無論、AIが実際に作品を生み出す時代になっています。その価値を判断する主体の人間が、AIを認め、創作の工業化を認めるといふ流れは、おそらく縮小すること

はなく、むしろ拡大しつづけることでしょう。

では、AIに頼らない創作物は、消えてしまうのでしょうか。

世界に一枚しかない本物の名画と、その大量の複製物を考えれば、わかりやすいかもしれません。価値、値打ちを比べる人はいないはずですよ。

なぜ、本物が尊いのか——この世に一つしかないこともさることながら、人々はその名画が出来上がるまでの、作者の人生に、思いを馳せるからです。

作者はどのような思いで、この作品に着手し、完成に漕ぎ着けたのか（あるいは未完のまま終わったのか）といった、歴史を辿るのが、価値判断の重要な材料となっています。

——AIは眠らず、夢を見ることもありません。死ぬこともないのです。

一方、人間には寿命があり、誰一人、例外のない死が待っています。

限りある人生、生命の時間を何処にどう費やしたのか——人間の尊厳、人間の創造性の根源を考えると、それを高められるのはAIではなく、同じ生身の人間だけだ

と、筆者は思っています。AIの領域が広がれば、むしろ人としての生き方、奥行きが、これまで以上に問われるのではないのでしょうか。

AIの威力を考えるほどに、強化すべきは「人間力」(人としての向上と魅力の発揮)ではないか、と筆者には思えてなりません。

では、AIを向こうに回し、「人間力」を高めるにはどうすれば良いのでしょうか。

方法はいくつもあるでしょうが、歴史の叡知(真理を洞察する精神能力)は、自らの「師」を持つことが、いかなる独学にも優ることを、雄弁に語っています。

かつて日本には、「師を敬う」という文化がありました。

「国の将に興らんとするや、必ず師を貴びて傳を重んず」(国が興り栄えるときには、必ず人の生きる道を説く師を尊び、また傳、すなわち人君を教え助ける人を重んじるものだ。師傳を賤しみ軽んじることは、国の乱れや崩壊のもととなる)。

右は、孟子につぐ大儒といわれた荀子の言葉です。

別に、難しいことはありません。「恩師」という言葉が象徴するように、われわれの

社会には学校の先生や先輩、社会人になってからは会社のデキる上司、取引先のベテラン、あるいは祖父母、父母といった身近な人々から、仕事や人生観を教わるという姿勢が根付いてきました。

ちなみに、「人生観」はドイツ語の「Lebensanschauung」を井上哲次郎が訳して生まれた語で、人生の意義、目的、価値や生き方についての考え方をいいます。

筆者の友人の中には、「うちの親父を人生の師、先達（せんだつ）（その道の先輩、案内者）として尊敬している」といつていた人もいました。

一様（いちよう）に親子関係がそうであるように、師弟の関係は熱を浴び、心象（イメー）としては部活の監督と選手、先輩と後輩といった、かつてのスパルタ式の、厳しい指導を連想される方がいるかもしれません。が、それは方法の一部が誇張されて伝えられたものであり、決して正しいものではありません。

「師弟」の関係や教育、学びは、「瀉瓶（しゃびん）」だと、筆者は考えてきました。

一つの壺（つぼ）から、他の壺へ水を注ぎ移す行為——仏語では師から弟子へ、仏の教えの

奥儀おうぎを、あますとこなく伝授することをいいます。

そのやり方を学ぶのが教育ですが、昨今は学校でも職場でも、「心理的な安全性」が重要視されるようになりました。

安全性を無視した厳しい接し方が、パワハラと見なされる場合も少なくありません。そのため指導すべき立場の先生、上司の立場にある人々は、教え子や部下に対して、相対気を遣つかっているように見受けられます（親の子に対する接し方も）。

もちろん、単なる暴言やいじめのような仕打ちは言語道断ですが、相手のためを思っ  
て厳しく指導することまで躊躇ちゅうちゆしてしまう現状は、筆者には少々行き過ぎのように感  
じられてなりません。何より、工夫のない手段の稚拙ちせつさによって、せっかくの「師」に  
教わり、学ぶ機会が失われつつあるのは、大変残念なことです。

歴史を振り返れば、師に学ぶことで、自らの人生を飛躍させる機会を得た事例は枚まい  
挙よに遑いとありません。それこそ、数えきれないほど存在します。

坂本龍馬は、勝海舟に学ぶことで歴史の表舞台へと登場しました。

高杉晋作たかすぎしんさく、久坂玄瑞くさかげんずい、伊藤博文いとうひろふみ、山縣有朋やまがたありともにも吉田松陰よしだしょういんという師匠（先生）がいました。

二十代前後の木下藤吉郎きのしたとうきちろう（のちの豊臣秀吉）は、主君の織田信長いっきよしひつしゆぞくの一挙手一投足いっしゆぞくに学び、それを弟・小一郎こいちろう（のちの豊臣秀長ひでなが）に教えました。

若き日の徳川家康は、三方ヶ原みかたがはらの戦いで武田信玄たけだのぶげんに完膚なきかんぷなきまでに叩きたたのめされたあと、敵である信玄を師と仰ぎ、その戦法や統治の手法を取り入れることで、のちの関ヶ原の戦いに勝利しています。

師と出会うため、幕末には「訪問癖ほうもんへき」と呼ばれる風潮が流行し、大志を抱く多くの若者が、日本全国に点在する有数の師を求めて、行き来しました。

当時の彼らには、新知識や技術を身につけたい、立身たてみしたい（世間に認められたい）、出世しゅっしよしたい（立派な身分になりたい）、豊かになりたい、といった師に学ぶための明確な目的がありました。

一方で、現代はどうでしょうか。やりたいことがとくにない、あるいは見つからない、と嘆く若者が多いといわれています。

「やりたいこと探し」を続けているうちに、気がつけば三十代・四十代を迎え、探す

こと自体を諦めてしまった、というケースもあるそうですね。

こうした話を聞きたびに、師匠の不在こそが、夢を諦める若者が増えている主因ではないか、と筆者は考えさせられます。

もし、坂本龍馬にとつての勝海舟のように、気づきやヒントを与え、具体的な未来へ導いてくれる師がいれば、やりたいことのない現代の若者にも、もっと明るい未来が待っているように思うのですが……。

加えて、師から学ぶという行為は、決して若い人だけに限られた特権ではありません。江戸時代中期の名君といわれた島津重豪しまづしげひでは、蘭学を熱心に学んだ大名として知られています。八十歳を過ぎてもなお学習意欲は旺盛でした。

重豪はオランダ商館の医師であるシーボルトとも交流し、彼から直接、西洋の知識を吸収しています。

重豪は自ら学ぶだけでなく、安永二年（一七七三）には学んだ西洋文化を取り入れた医学館や明時館めいじかん（天文館てんもんかん）を開設しました。

さらに、独自に薩摩藩をつくったり、藩学興隆のために藩校である造士館を創設したりもしたのです。

西洋文明を薩摩藩に取り入れるために、莫大な設備投資をして開明政策を押し進め、練武館、葉草園、物産工芸試験場などの建物を建設し、地図や図鑑なども頻繁に取り寄せました。これらがのちの薩摩藩をして、明治維新の先頭を切らせることにつながったのです。

また、『富嶽三十六景』を描いた江戸時代屈指の画家である葛飾北斎も、九十歳で亡くなる直前まで、常に新しい画法を学びつづけました。一説には、生涯で三十数通りもの描き方を習得した、といわれています。

北斎の描いた富嶽(俗に裏富士とよばれた十図を追加した全四十六枚)には、同じ富士山の描写はありません。

この奇跡を成し得たのは、本人の才能もさることながら、各々の画法を北斎に教えた師のおかげ、ともいえます。

戦国から江戸時代にかけて活躍した藤堂高虎——豊臣秀長の家老となり、のち国持大名となる——は、現代のビジネスパーソンのように、必要に応じて異なる分野の師を求め、多忙な中で寸刻を惜しんで勉強に励み、己れの多彩な才能を開花させた人物といえます。

本来、槍を手にしての「一番槍」殿軍<sup>しんがり</sup>を得意とした高虎でしたが、主君であり師である秀長に、鉄砲、兵站<sup>へいたん</sup>（補給係）、築城、水軍など、次々にやったことのない部署への異動を命じられました。

高虎は最初こそ戸惑うものの、いずれも新しい自分の可能性として、積極的に受け入れて、楽しみながら学び、気づけば將に必要な能力のすべてを、手にしていました。高虎の師匠・秀長が、将来を見越して、必要な力がつくように育ててくれたのです。

このような能力開発は、自分一人の力ではなかなかできません。師が自身の経験を通じて導いてくれることにこそ、真の価値があるのです。では、そうした師に出会うにはどうすればいいのでしょうか。

そして、師から多くのことを吸収し、それを活かすには何をどのように工夫すればいいのか、歴史の一流、偉人たちの例を通じて、具体的にみていきたいと思います。

令和八年(二〇二六)三月吉日

東京・練馬の羽沢にて  
加来耕三

003 はじめに AIの時代だからこそ、「師匠」が必要

## 第一章 今も昔も、賢い人は師から学んでいる

024 三年かけて学ぶよりも三年かけて師を選ぶべき

027 師匠に学ぶことの三つのメリット

031 師匠を訪ねて三千里!? 幕末に流行った「訪問癖」

035 本が高くて買えないため丸々一冊を書き写した

039 半年間、深夜から朝まで学びつづけた勝海舟

045 師匠から学んだほうが圧倒的に効率がいい

049 自分に合う師を選ぶことが大事。信長ではなく、信玄から学んだ家康

## 第二章

なぜ、学ぶのか？

一流の目的思考とは？

080 偉人は師匠から何を学んだのか①

「強くなりたい」——最前線で戦う術を師に学んだ

084 偉人は師匠から何を学んだのか②

054 石田三成が最後に負けたのは、師に学ばなかったから

058 叱つてくれる師がいれば関ヶ原の勝敗も変わった

064 土方歳三は我流を貫いたことで自滅した

067 歳三には武士道の基本がなかった

072 師に学ぶコラム①

天才・佐久間象山も決して独学をせず、師匠のもとで学んだ

なにがなんでも出世したい。そのために師匠を次々に変えた

091 偉人は師匠から何を学んだのか③

幕府を守るために最先端の技術を学んだ

102 偉人は師匠から何を学んだのか④

与えられた場所で輝きたい——異動に耐え得る力を磨いた

111 偉人は師匠から何を学んだのか⑤

二番手として、リーダーを支える全能力を師から学んだ

123 偉人は師匠から何を学んだのか⑥

ここぞという時のタイミングを師から学んだ

133 偉人は師匠から何を学んだのか⑦

絵がうまくなりたい一心で突破りの勉強法を実践！

138 師に学ぶコラム②

目的を持たない徳川慶喜は最後までブレつづけた

### 第三章

## 潜在能力が開花する 師匠の賢い選び方

146 師に向いている人、向いていない人の違い

151 師匠の賢い選び方①

長所を褒め、チャンスをくれる師や上司を選びなさい

157 師匠の賢い選び方②

時代の先を読む力がなければ、人にものを教える資格はない

165 師匠の賢い選び方③

気くばりに長けた人物でなければ、人の上に立つ資格はない

174 師匠の賢い選び方④

短所なんて誰にでもある！部下の長所を伸ばさなくてどうする

180 師匠の賢い選び方⑤

師に必要な能力は、相手にわかりやすく伝える力

186 師匠の賢い選び方⑥

学びの楽しさを教えてくれる師なら勉強も苦にならない

195 師に向かない人の共通点とは？ 宮本武蔵、織田信長の例

203 師に学ぶコラム③

剣聖・塚原ト伝の弟子の正しい選び方

## 第四章

師から学んだことを活かした人、  
活かせなかつた人

210 学びを活かす四つの方法

215 学んだことを活かす方法①

謙虚な姿勢で多くのことを吸収する

229 学んだことを活かす方法②

学んだことを何に活用するか、事前にイメージしておく

241 学んだことを活かす方法③

理解したことからどんどん始める

250 学んだことを活かす方法④

もともと持っている技術を活かす

258 師に学ぶコラム④

良き師匠を心の支えとした福沢諭吉の成功

264 師に学ぶコラム⑤

良き師匠も友人もいなかった明智光秀の悲運